

保育所における感染症の基礎知識

～新型コロナウイルス感染症への対応～

第1章 保育所における感染症の基礎知識

第1章

保育所における感染症の基礎知識

1. 感染症とは？

病原体が体内に侵入し、増殖する＝感染

感染しても症状が出ないこともある
→「不顕性感染」
症状が軽症で、本人・周囲も気が付かない軽症例

知らない間に感染源となっ
ていることがあります

高熱、咳、嘔吐、けいれんなど感染により好ましくない
反応が現れた状態（発症した状態）＝「感染症」

症状がある場合のみに感染対策を行っても
感染拡大は防止できない

2. 感染源となる病原体

細菌：室温・栄養分など条件が合えば自分で増殖
食中毒を引き起こす菌（O-157など）、
百日咳、溶連菌、とびひ・膣炎・尿路感染症等の原因菌
（黄色ブドウ球菌や大腸菌など）

多くが抗生物質が有効

ウイルス：人など**生きた細胞の中のみ**で増殖
麻疹・風疹・水痘・手足口病、インフルエンザ、
新型コロナウイルス感染症、感染性胃腸炎、
アデノウイルス感染症 など

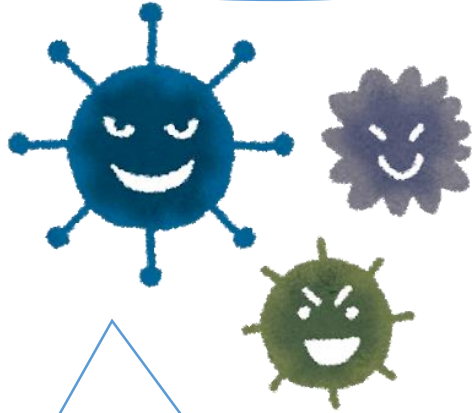
抗生物質は無効
抗ウイルス薬のみ有効

例：抗インフルエンザ薬
※新型コロナウイルスにはまだ開発途中で

3. 感染するしくみ（感染成立の3大要素）

この3つがそろうことで感染が成立

感染源



病原体が存在するヒト
や動物、物

感染経路



- ①接触/経口感染
- ②飛沫感染
- ③空気感染
- ④マイクロ飛沫感染
- ⑤血液媒介感染 など

宿主

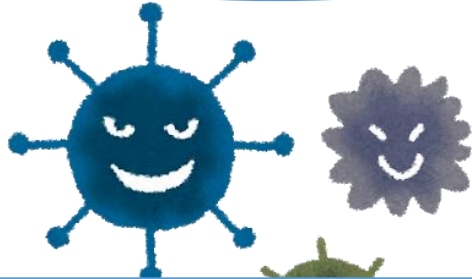


- 子どもの未熟な免疫
- 生活行動は発達過程
- 感染予防策を自立して
行うことがまだ難しい

3. 感染症拡大予防の原則

いずれかの段階を遮断し、感染拡大を防ぐ

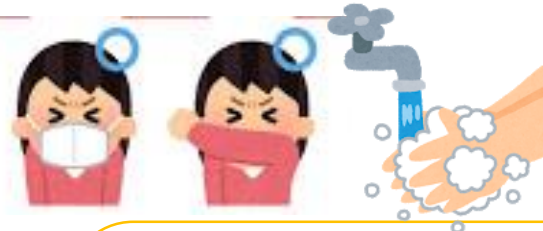
感染源



病原体の侵入を完全に防ぐことは困難

病原体を持ち込まない
・体調が悪い場合は出勤しない、登園しない

感染経路



例：

- <飛沫感染対策>
 - ・せきエチケット
- <接触感染対策>
 - ・手指衛生の徹底
 - ・環境の衛生
- <空気感染対策>
 - ・定期的な換気

宿主

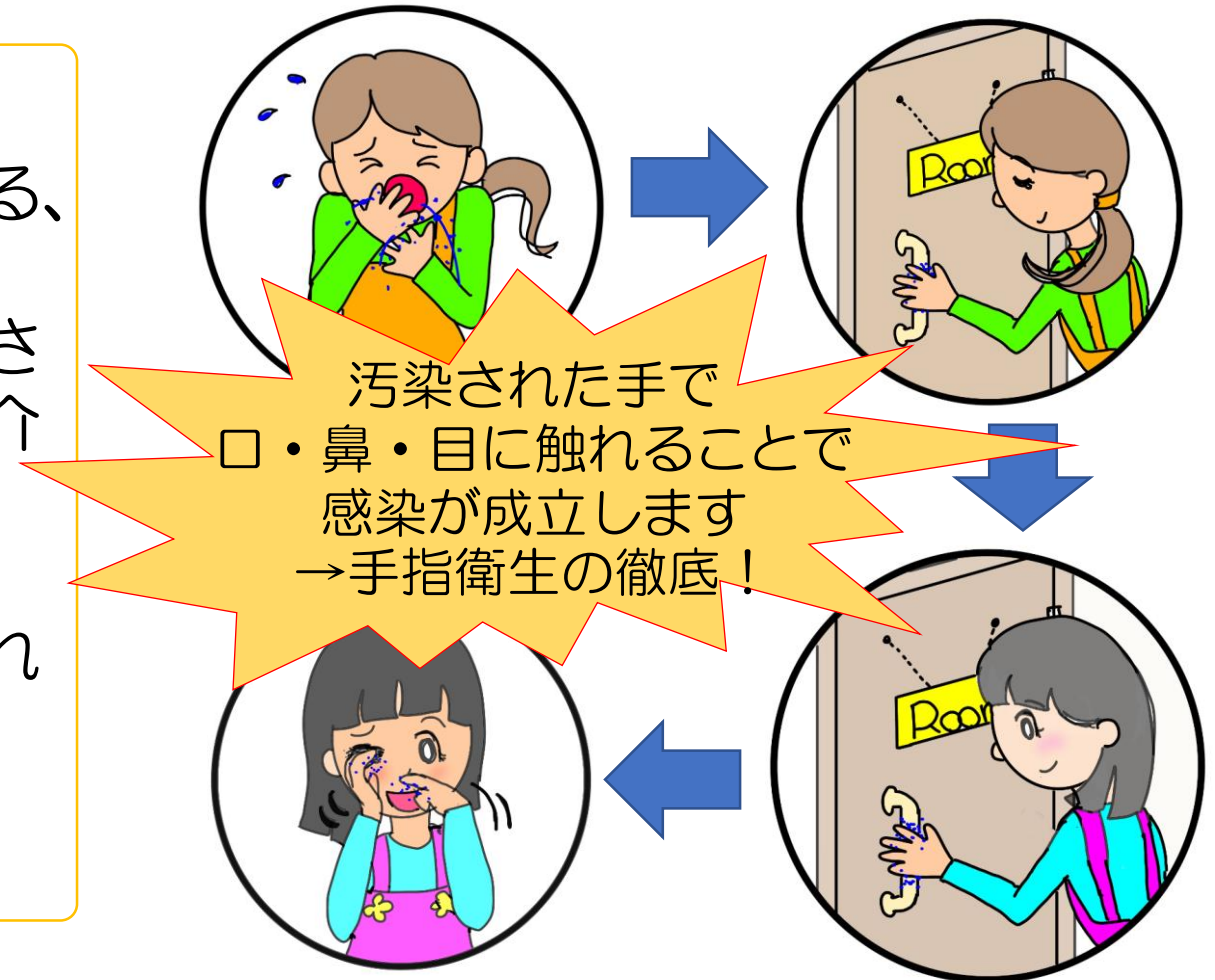


- ・規則正しい生活
- ・予防接種
- ・感染予防行動の健康教育

4. 感染経路と保育所における注意点

◆ 接触感染/経口・糞口感染

- ① 病原体に触れ手指が汚染される
(例：咳やくしゃみを手で押さえる、オムツ交換後手を洗わない)
 - ② 飛沫による直接的に環境が汚染されたり、汚染された手(①)を介して環境が汚染される
 - ③ 汚染された環境を人が手で触れ、汚染された手で口や鼻、目にふれることで粘膜から関する
- ※乳幼児は、手指や物を口に持っていく行動が多く、接触感染が生じやすい



4. 感染経路と保育所における注意点

◆接触/経口・糞口感染

接触による 主な感染症	<p><ウイルス> 感染性胃腸炎（ノロウイルスやロタウイルスなど） 咽頭結膜熱や流行性角結膜炎（アデノウイルス） 手足口病やヘルパンギーナ（エンテロウイルス） 新型コロナウイルス感染症、RSウイルス感染症 水痘・帯状疱疹ウイルス</p> <p><細菌> とびひ（黄色ブドウ球菌や溶血性レンサ球菌） 腸管出血性大腸菌感染症（O157など）、赤痢菌等</p>
保育園の対策	<ul style="list-style-type: none">• 手洗い等の手指衛生• 環境衛生• 衛生的なオムツ交換• 嘔吐物や便、血液や鼻水・唾液などの取り扱いは感染対策を常に行う

4. 感染経路と保育所における注意点

◆飛沫感染

会話や咳によりウイルスを含む
飛沫や粒子を吸い込むことで感染する
※飛沫は1-2mで落下する



飛沫を介する 主な感染症	<ウイルス> 新型コロナウイルス インフルエンザウイルス, RSウイルス 流行性耳下腺炎（ムンプスウイルス） <細菌> 百日咳菌 マイコプラズマ など
保育園の対策	• 咳エチケットの実施 （マスク着用を含む） • 職員の体調管理

4. 感染経路と保育所における注意点

◆ 空気感染

マイクロ飛沫感染

小さな飛沫が乾燥し、病原体（飛沫核）が感染性を保ったまま空間内に拡散、遠くにいる人もそれを吸い込んで感染
※マイクロ飛沫感染：密室空間で数時間漂う

空気感染

漂い続ける



エアロゾル感染

しばらく漂う

飛沫感染

すぐ落ちる

空気感染による
主な感染症

麻疹（はしか）
水痘（水ぼうそう）
結核 など
＜マイクロ飛沫感染＞
新型コロナウイルス（特殊環境下）

保育園の対策

発病者の隔離と部屋の換気が基本
・対応するワクチンの接種
※子どもや職員の接種歴/罹患歴調査

5. 新型コロナウイルス感染症の特徴①

- 感染経路：飛沫感染、接触感染、マイクロ飛沫感染
※マイクロ飛沫は換気が不十分な室内での大声や会話、運動などにより生じる。
新型コロナウイルス感染症の場合には、飛沫感染・接触感染が主な感染経路であり、マイクロ飛沫感染の頻度は低い。
- 新型コロナウイルスの環境中での生存時間

ステンレス	プラスチック	ボール紙	金属（銅）	空気中
2-3日	2-3日	24時間	4時間	3時間

飛沫感染予防に加えて、接触感染を予防することも必要
マイクロ飛沫感染対策は“換気”を徹底する

5. 新型コロナウイルス感染症の特徴②

- 感染期間：発熱や咽頭痛、咳などの症状が出る2日前から発症後10日間
※無症候感染者の場合→検査を行う2日前からが感染期間
- 潜伏期間：1-14日（平均4-5日）
※感染した5日前後に発症しやすい



～感染期間と潜伏期間の違い～

感染期間とはウイルスを持つ人が他の人にうつす可能性が高い期間
潜伏期間とはウイルスに感染し発症するまでの期間

新型コロナウイルスにおける “無症状”の感染者とは？

～検査をした時点で“無症状”とされる感染者の2つの経過～

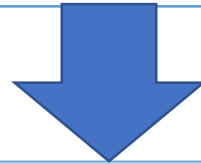
- ◆ 発症せずにそのまま過ごす→無症候感染者（不顕性感染）
- ◆ 検査をした時点では症状が出ていなかった（潜伏期間）
→その後発熱等の症状が出る

人にどれぐらい感染させるのか？

- 無症候感染者→全体の5%程度
- 発症する前の感染者→全体の46%
- 発症した人からの感染→全体の38%
- 物など環境を介した感染→全体の10%

6. 新型コロナウイルス感染症の 子どもの特徴

- 軽症例が多く、重症化はごくわずか
- 他の年齢層に比べ乳幼児の罹患する割合は少ない。
0-14歳の間での罹患の2割は1歳以下の子どもであった
※軽症例が多いことから検査に至らず検知されていない可能性も高い
- 症状は発熱、乾性咳嗽、咽頭痛、下痢などが多い
- 子どもの感染経路の6割以上が家庭内、6%程度が保育施設や学童、習い事等の職員からであり、大人からの感染例が多い



保育施設での感染対策のポイント

- 大人が施設内にウイルスを持ち込まない
- 大人から子どもへの感染を防ぐ

7. 新型コロナウイルス感染拡大防止の基本

感染源



感染経路



宿主



体調不良時は
登園・出勤を
しない

咳エチケット
手指衛生
環境衛生
定期的な換気

健康教育と
規則正しい生活
ワクチンの接種